工學界の元老
古市公威男薨去

既に佛國に留學、理學士の稱號を受け、歸朝後明治十三年來內務、遞信、朝鮮の各土木技術官として斯界に貢獻する處實に枚擧に遑がない。全く我國工學界の先覺であり元老であつて、此非常時の今日男を失ふは誠に國家の大なる損失である。

薨去の報天聽に達するや特旨を以て旭日桐花大綬章を加授された。

葬儀は二月一日午後一時より青山葬場に於て擧行され、朝野の名士數千の告別あり近來稀な盛大さで、巨星葬送に相應しいものがあつた。

男の功績を物語るにはむしろ其經歷を想記するに如かず、玆に摘記することにしたい。

明治十三年歸朝と共に土木局雇を命ぜられ、之を官界の振出として同御用係、文部省御用係(兼)を經て十七年七月內務三等技師に任ぜられ、十九年五月には工科大學教授、工科大學長、帝國大學評議官の兼務を命ぜられ、二十年學位令の制定さるゝや、松本、原口、長谷川、志田、高松、谷口、戸津、辰野の九氏と共に帝國大學評議會の推薦によつて最初の工學博士の學位を得た(五月七日付)。同年には一旦工科大學長を辭したが、翌二十二年十月再び工科大學長、帝國大學評議官を兼命され、同年六月には現在の東京工大の前身東京工業學校の商議委員となり、一方內務省にあつては土木局長に昇任した。

二十三年九月に貴族院議員に勅撰され、二十四年土木局長としての勅任官に進み、二十七年には內務省土木技監として內務技術の最高位に就き治績大に見るべきものがあつたが、三十一年七月一旦官を辭した。同年十一月遞信次官として再び官途に入り、其間遞信省通信局長心得、同鐵道局長心得、日本鐵道株式會社會計監督官、同管船局長心得等を兼務、同十二月に鐵道會議々員を被仰付、三十二年二月に工學博士會々長に當選した。

同年二月に鐵道國有調査會委員となつてかの有名な鐵道國有事業の樞機に參劃、同六月鐵道會議々長となり、大に敏腕を振つた。

三十三年五月官制改革により一旦廢官となり同時に遞信省總務長官兼遞信省官房長となり、後鐵道作業局長官心得を兼務、港灣調査會委員となり、同再び本官並に兼官を辭した。

三十六年三月に帝國大學名譽教授の名稱を受け、同年三月鐵道作業長官として三度官途に入つたが、同年十二月に三度官途を退き風雲急を告ぐる韓國に命を來じ、京釜鐵道株式會社總裁となつて日露の大役に承要なる役割をつとめ、戰後三十九年六月統監府鐵道管理局長官となり、戰後經營の一役を買ひ、同年九月には帝國學士院會員に推薦される。翌四十年六月には四度官を退いた。

稍後は野にあつて專ら公共の事に從ひ四十一年には日本大博覽會の評議員及工事計畫審査委員、四十二年には日英博覽會評議員、四十三年には議院建築準備委員會委員、臨時治水調査會委員、四十四年には當時問題となつてゐた廣軌鐵道改築準備委員會委員、港灣調査會委員、大正七年には臨時教育會議委員、帝國學士院第二部長、臨時議院建築局顧問、八年には度量衡及工業品規格統一調査會委員、道路會議々員、九年には學術研究會議々員、十年には工業品規格統一調査會委員、十一年に鐵道會議々員、十二年に帝都復興院評議會評議員等凡そ工學、工業界に事ある毎に常に其名を列し、此間八年十二月二十七日男爵を特授され、十三年一月に樞密院顧問官となり、十四年には震災豫防評議會評議員等を仰付けられ、今日に及んだ。

此外此永い官界生活の間には中央衛生會臨時委員、第三回及第四回內國勸業博覽會審査官、震災豫防調査方法取調委員、土木會委員、臨時博覽會評議員、同事務局評議員、足尾銅山鑛毒事件調査委員、第五回內國博覽會、勸業博覽會評議員及同審査第八部長、高等教育會議々員、博覽會開設臨時調査委員(三九年)等を仰付けられた。

かくの如く男の一生は即ち我國明治工業界、特に土木史の一面を物語るものである。